

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13323

研究課題名（和文）日本における“善き生”の構想とは何か 「正直」の倫理思想史／比較思想史的研究

研究課題名（英文）What is the notion of "well-being" in Japan?: ethical/comparative study on "Shojiki"

研究代表者

板東 洋介 (Bando, Yosuke)

皇學館大学・文学部・准教授

研究者番号：90761205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：神道の枢要徳である「正直」については、日本倫理思想史と神道学の両者の立場から相対立する有力な解釈が提示され、定説を見ていない。本研究は神道文献および儒教・仏教との影響関係の精査を通じて「正直」観念の内実の一端を明らかにした。考察の中心となったのは近世の国学者・賀茂真淵の「直き心」の議論である。さらに関連して、神道の哲学的特質や日本思想全般に共有された他者観念についても考察を行い、その成果を国際的に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神道の主要概念であり、きわめて一般にも著名なものでありながら、その思想的内実が十分に検討されてこなかった「正直」について、神道文献の精査と、この概念の形成・展開に多大な影響を与えた仏教および儒教との関係の調査を踏まえて、他者に際会した際の際の非日常的な緊張感としてその内実を明らかにした。さらにここに現れた他者観念が前近代の日本思想史の顕著な特徴をなす仏・聖人といった特権的人格、あるいは經典への「信」へと思想的に展開してゆく過程も併せて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Concerning Shojiki, the cardinal virtue of Shinto, each-opposing interpretations have been presented from both Shinto studies and the studies of Japanese ethical thoughts, and never reaches a fixed conclusion. This study elucidated some part of this Shojiki's content, investigating Shinto materials and its relations of influence with Buddhism and Confucianism. It was the argument about "naoki kokoro (a straight-foward heart)" by Kamo no Mabuchi, one of the kokugaku scholars in the early modern period that was focused on in this study. Furthermore, the philosophical feature of Shinto and the peculiar notion of others shared by all Japanese thoughts were also given consideration and those results were internationally published.

研究分野：日本倫理思想史

キーワード：正直 神道 誠 国学 他者 儒教

1. 研究開始当初の背景

コミュニタリアニズムと神道 近年、本邦の倫理学(および隣接する政治哲学)の領野においては、共同体主義(Communitarianism)の日本への移入と連動して、神道研究の需要が高まりつつある。周知のとおり、そこでは形式的・価値中立的な自由主義・個人主義に抗して、共同体の紐帯、そこに存する伝統的な“善き生”の構想、そして諸々の“よさ”と徳、等々の意義が再評価されつつある。しかしこのとき、多く北米の社会・政治風土の中で思考する共同体主義者らが想定する伝統的共同体やその「共通善」は、特殊に欧米的なそれ「市民」から構成されるポリス、キリスト教の諸教会、アメリカ開拓期の小共同体等をモデルとするものであり、日本にその議論を直訳的に適用できるものではない。“日本での共同体主義”には賛否両論があるが、まずは論の端緒を開くためにも、日本の伝統的な共同体と、そこに通底する“善き生”の構想とは何かという問いについて、改めての検討が必要な段に立ち至ったといえよう。現に、サンデルの著書の翻訳や『コミュニタリアニズムのフロンティア』(2012)/『コミュニタリアニズムの世界』(2013)の編著等々を通じて日本への共同体主義の導入を主導する小林正弥は『神社と政治』(2016)を上梓して、まさに神道儀礼を核として同胞意識で結ばれた氏子共同体を、明示的に“日本での共同体主義”の具体的な場とみなして講究した。所謂「国家神道」への忌避感から戦後十分に検討されてこなかった、神道への問いが再び浮上しているのである。

徳目としての「正直」 その際、研究の焦点として浮上してくるのは、神道の思想的方面とくにそこに存する“善き生”の構想である。小林前掲書は、神道が日本の「共同体宗教(communal religion)」として伝統的に「公共性」を担っていたことを強調しているが、そこで共有された徳、あるいは“善き生”の構想とは何か、という内的な次元にまでは考察が及んでいない。神道の“枢要徳”は「正直」(類義語に「清浄」「誠」)である。「正直」は記紀・宣命の「清明心」にはじまり、中世伊勢神道によって哲学的に深められ、室町期以降庶民社会に流布した三社託宣や、近世石門心学の民衆教化などを通じて、日本の庶民道徳を形成した。多くの日本人にとって“善き生”とは一言でいえば「正直な生」であったし、今なおそうである。しかしこの「正直」の通説的な理解は、じつは問題含みである。「正直」の解釈として今日最も有力なのは、和辻哲郎が『日本倫理思想史』(1952)で示したものである。それは共同体に対する個々人の「後ろ暗い所のなさ」「私心の無さ」「全体への帰依」を「正直」の内実とする。この「無私」としての「正直」理解は、高校「倫理」の教科書記述にも採用され、定説の位置にある。しかし他方、皇學館大学・國學院大学を中心とする神道学(神道教学・神学)の立場からは、全く異なる理解が提出されている。それは「忌みつつしむことを基本条件として、捧げ、祈りつつ、神にお仕へする」心身のありよう(谷省吾『神職の立場』1979)あるいは「祓(はらへ)の倫理化」(同『祭祀と祈り』1985)を「正直」の中身とするもので、いわば「敬虔」としての「正直」理解である。「正直」の相関項は共同体か、あるいは神か? 「正直」とは垂直的な神への信か、水平的な共同体への忠誠か?

こうした問いは、無論“神道は宗教か、道徳か”という基底的な問いと連動しているが、アリストテレス倫理学の決定的な影響下にある共同体主義を日本で議論/実践してゆくにあたって、在来共同体の成員の大半が默契的に同意している徳と“善き生”の構想との内実を括弧にいれたままの議論は不可能であるか、少なくとも不毛である。和辻を学祖とする東大倫理学研究室に学び、神道神学の中心地である皇學館大に赴任した申請者は、これまでも懸案であり続けたこの「正直」解釈の二分岐を解決し・架橋する責務とポテンツとを有するものとも考え、「正直」を焦点とする本計画を策定した。

2. 研究の目的

日本の在来共同体が各々に理想として有する徳目の最大公約数的な表現である「正直」について、

- (1) 神道文献の再精査を通じてその原義と史の変遷の過程とを明らかにし、
- (2) さらに(1)の基礎研究を踏まえて、儒教および西洋思想史との比較思想的考察によって一層その特質を明瞭にし、
- (3) (1)・(2)を前提として、とともに、得られた知見の国際的な発信を行う。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」に照らして、次の三部門から構成される。

- (1) 神道文献、とりわけ神話テキストへの注釈群を精査し、「正直」の思想的内実と発展過程とを哲学的・概念的に再構成する。
- (2) 基礎研究を踏まえて、儒教伝統における「誠」・キリスト教伝統における「敬虔」「畏怖」との比較を行い、「正直」の思想的内実をより立体的に把握する。
- (3) 研究成果の公刊と、その国際発信を通じて、研究成果の広汎な共有を図る。

4. 研究成果

研究の主な成果 上記「研究の方法」(1)に相当する主要な成果は、単著『徂徠学派から国学へ：表現する人間』(2019)である。本書は日本の近世中期における儒学と国学との論争を主題とし

た研究書であるが、国学者・賀茂真淵の思想を取り扱う第二部はその「直き心」観念に注目して、真淵における「正直」観念の解明、さらには儒教経典（『礼記』）における「直情径行」との関連を主題としている。本書は第41回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）と第14回日本思想史学会奨励賞と授与され、本研究への高い評価とその大きなインパクトとを示している。また『日本思想史辞典』（2020）で執筆を担当した「本居宣長とその門流」「正直と誠」の両項目はともに「正直」観念の思想史的研究という本研究の成果発表としてきわめて大きな意義を有するものである。さらに神道文献の精査によって得られた神道の哲学的内実についてはチューリヒ大学で開催される国際シンポジウム“Time in Medieval Japan”にて中世神道の時間意識についての発表を依頼され、すでに“Medieval Mythologies”と題した英文原稿を提出済みである。上記「研究の方法」(2)に相当する主要な成果は、共著論文集『和辻哲郎の人文学』（2021）に寄稿した「乏しき時代の『論語』：和辻哲郎『孔子』をめぐって」である。本論文は日本近代における儒教受容のみでなく、その前提をなす日本近世の儒教の特色にも言及し、その中で本居宣長と伊藤仁斎との孔子および『論語』観の特質を通観した。また上記『日本思想史辞典』の項目「正直と誠」は神道の「正直」と儒教の「誠」とを対比し、さらに日本における両者の思想的影響関係にまで説き及んだもので、本部門の成果発表としての意義も併せ持っている。上記「研究の方法」(3)に相当する主要な成果としては、国内での成果発表としては上述の『徂徠学派から国学へ』と『谷崎潤一郎』（人と思想 198, 2020）の単著二冊の公刊が中心である。後者は近代日本の小説家の生涯と作品を論じたものだが、谷崎と本居宣長との思想的継受関係や、意図的に古典を踏まえた谷崎作品の自然描写などに見られる神道的・民俗学的感性を特筆した点に膨大な谷崎研究の中での特質があり、本研究の成果発表として大きな意義を持つものである。また国際発信としては、国際シンポジウムでの発表“Does 'Eastern Nothingness' Really exist?”が最も大きな成果である。本シンポを基にした論文集の刊行も進行中で、すでに完成原稿（英文）を編者に提出済みである。また上述の国際シンポ“Time in Medieval Japan”での日本神話についての英文発表も本研究の国際発信の一環として特筆できる。こちらも開催後に英文論文集としての刊行が企画中であり、総じて本研究は国際的にも有為な発信を行い得ていると自己評価できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 板東洋介	4. 巻 36
2. 論文標題 書評：天野聡一『近世和文小説の研究』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『鈴屋学会報』	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Bando Yosuke
2. 発表標題 "Does Eastern Nothingness Really Exist?"
3. 学会等名 Nature, Technology, Metaphysics: An Encounter Between German And Japanese Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 板東 洋介
2. 発表標題 「徂徠学・国学のなかの『武』」
3. 学会等名 第8回東海日本思想史研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川又 俊則、森 一郎、新田 均、板東 洋介、渡邊 毅
2. 発表標題 「〔シンポジウム〕「畏敬の念」をどのように教えるか」
3. 学会等名 第4回道徳科教育協議会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 日本思想史事典編集委員会:編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 718
3. 書名 『日本思想史事典』	

1. 著者名 板東洋介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 278
3. 書名 『徂徠学派から国学へ：表現する人間』	

1. 著者名 朱子学会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 商務印書館	5. 総ページ数 346
3. 書名 『朱子学年鑑2016』	

1. 著者名 板東洋介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 300
3. 書名 『谷崎潤一郎』（人と思想198）	

1. 著者名 木村純二, 吉田真樹:編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 『和辻哲郎の人文学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------